様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 ２１ 日現在

機関番号：１４４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2012～2016
課題番号：２４５２０４２７

研究課題名（和文）語形成による事象叙述から属性叙述へのタイプシフト：語彙意味論からのアプローチ

研究課題名（英文）Type Shift from Event Predication to Property Predication through Word Formations: An Approach from Lexical Semantics

研究代表者
由本　陽子（Yumoto, Yoko）

大阪大学・言語文化研究科（言語文化専攻）・教授

研究者番号：９０１８３９８８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,900,000円

研究成果の概要（和文）：日本語の「名詞＋動詞連用形」型の複合語には、本来出来事を表す動詞を主要部としながら、モノを表すものや属性描写表現となるものがある理由を明らかにした。Sugioka(2001)では、後者は、動詞の付加詞との結合によると主張されていたが、項との結合でも叙述機能を持ち得ることを示し、動名詞となる場合も含め複合語が叙述機能をもつ条件は、語内部で満たされない項をもつことであると主張した。また、Sugiokaの主張に反し動詞が含意する結果状態を表すとも限らず、「勤め帰り」のような場面レヴェル述語もあり得ることを示した。動詞の意味からモノや属性の概念へとシフトするメカニズムを生成語彙論の枠組みで分析した。

研究成果の概要（英文）：I have investigated the reasons why Japanese [N+V] compounds, which are, being headed by verbs, supposed to express events, can designate concrete objects or describe property. According to Sugioka (2001) those which describe property of things are limited to the compounds formed by incorporating the adjunct of the head, but I showed that incorporation of the argument can also form a compound which describe property and state of things and claimed that if there is an argument which remains unsatisfied within a compound, it can be used as a predicate, namely predicative nominal or a verbal noun. In addition, I pointed out that contrary to Sugioka's claim that the predicative nominal compound is formed through focus shift from action to result in the LCS of a verb, some examples such as tsutome-gaeri (lit. work-go home "on one's way home from work") are stage-level. I analyzed the shift of event description by a verb to property description in the framework of Generative Lexicon.

研究分野：語彙意味論、語形成論

キーワード：語形成　属性描写　動詞由来複合語

１．研究開始当初の背景

語彙意味論は語彙の意味とそれが生起する文の関係を体系的に明らかにすることを目指すものであるが、従来の語彙意味論研究は、動詞の意味と構文の関係、それも特に事象叙述に焦点をあてたものばかりで、形容詞類による状態文や属性叙述文を含めて総括的に述語の意味と構文を扱うものがほとんどなかった。また、述語を基体とする語形成の研究においても、出来事名詞やモノ名詞については、日英語ともに本研究代表者も含めて多くの研究者が取り組み、それなりの成果があがっているが、属性描写機能をもつ語の形成についてはまだほとんど研究が進んでいないという現状があった。特に出来事名詞（「菓子作り」）やモノ名詞（「花売り」）と形態的には同じ動詞の連用形を主要部としながら、「白塗り」「石造り」のように属性描写にしか用いられないものについては、Sugioka(2001)にその形成メカニズムの違いが主張されているものの、必ずしも十分な説明が与えられているとは言えないと思われた。本研究代表者は、この動詞を基体とする複合語形成に特に焦点をあてることにより、本来事象叙述を行う述語がどのような条件のもとに属性描写機能を持ち得るのかが明らかになると考えて考察を進めていた。

２．研究の目的

(1) 上記の背景を受けて、主に日英語の動詞をもとにした語形成を対象として、事象叙述から属性叙述へのタイプシフトのメカニズムを明らかにする。

(2) 形容詞類の意味を概念構造(LCS)とクオリア構造を用いて体系的に行い、事象叙述のみならず属性叙述も含めて総括的に述語の意味を記述できる語彙意味論を構築する。

３．研究の方法

(1) 日本語の「動詞＋動詞」型と「名詞＋動詞」型の複合語が連用形となり、コピュラを介して属性叙述に用いられ得る条件とその意味解釈を考察した。

(2) 日本語の「名詞＋動詞連用形」型の複合語にはモノ名詞として解釈されるものが非常に多いため、属性を表す名詞となるものの性質を明らかにする前に、まずモノ名詞として成立する場合について先行研究を再検討し改めていくつかのカテゴリーに分類し、その後、属性叙述の機能を持ち得るための条件について考察した。

(3) 日本語の動詞の連用形およびモノ名詞に「ひと」を付加することでどのような意味カテゴリーの語が形成されるかについて、考察し、語形成の過程を経て叙述機能に変更が生じるメカニズムについて考察した（伊藤たかね氏（東京大学）、杉岡洋子氏（慶応大学）との共同研究を含む）。

(4) 事象叙述から属性叙述のタイプシフトが起こるメカニズムを生成語彙論のクオリア構造を用いた語彙意味記述と共合成や強制などのメカニズムで形式的に説明する方法を模索した。

４．研究成果

(1)　日本語の「動詞＋動詞」型の複合動詞の連用形が属性描写に用いられるものは数少ないが、その理由が意味的に説明されることを明らかにした。すなわち、多くの語彙的複合動詞においては、非主要部が主要部動詞が表す事象の手段などをより特定し、主要部が表す事象のサブカテゴリーを作ることが動機づけとなっているため、それを属性描写にシフトすることが難しいのである。また統語的複合動詞を作る「すぎる」を主要部とする複合動詞の連用形については、属性描写に用いられる２タイプがあることを明らかにし、その成果は図書論文⑧に公表した。

（2）モノ名詞を表す日本語の「名詞／形容詞＋動詞連用形」について、動詞の項構造に照らして非主要部がどのような役割を担っているか、また、複合語形成後の項の具現形式がどのようになるか、という観点から、その意味解釈メカニズムにいくつかのパターンがあることを明らかにし、その成果を学会発表②（公開シンポジウム）と図書論文④⑤で公表した。

(3)「ひと」がモノ名詞につきながら、「ひと刷毛ぬる」のように事象と解釈される場合、いっぽう動詞連用形につきながら、「ひとすくいの砂」のようなモノの計量表現に使われる場合とがあることに注目し、前者は名詞のクオリア構造から事象解釈が強制によって引き出され、後者は結果名詞と同様の解釈メカニズムが適用されていることを明らかにした。これは伊藤たかね氏、杉岡洋子氏との共同研究として進めたものであり、学会発表①④および、図書論文②においてその成果を公表した。

(4) 日本語の「名詞＋動詞連用形」型の複合語が「の」を介し名詞の前に属性描写表現として現れたり、コピュラ文の述部に現れる場合について、そのタイプ分けと、それぞれが叙述機能を獲得するメカニズムについて、生成語彙論の道具立てを用いて明らかにした。特に、Sugioka (2001)や伊藤・杉岡(2002)では、「述語名詞」と呼ばれているこのタイプの複合名詞は、動詞の付加詞に相当する要素の結合によるものであり、動詞の LCS の結果に焦点があてられたものだとする主張がなされていることに対して、疑問を呈し、以下の点を明らかにした。まず、「瓶詰め」「袋入り」のように、項との結合であっても叙述機能を持ち得ることを示し、杉岡の主張する、非主要部が項であるかどうかによる分類は無効であり、述語としての機能をもつには、語内部で満たされていない項が複合語に認められることが必須条件であって、非主要部が付加詞であるのはその一つのタイプに過ぎないことを主張した。また、必ずしも動詞

が表す事象が含意する結果状態を表す描写になるとも限らず、「勤め帰り」のような場面レヴェル述語もあり得ることを明らかにした。また、動詞が状態性である場合（所有の意味の「持つ」）、事象名詞としてよりもむしろ主語の属性描写をする形容詞類としての解釈（「所帯持ち」）が自然であることも、杉岡の主張の反論となり、動詞の意味によっても複合名詞の解釈が影響されることも明らかにした。これらの成果は論文②④⑤と図書論文②④⑥で公表した。さらに、論文①と図書①では、非主要部の名詞が部分名詞である場合（「先割れ」）の属性描写が可能となるメカニズムについてもこれまで提案してきた分析の拡張により説明できることを述べた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 8　件）

①由本陽子　「部分名詞を非主要部とする複合語から見た動詞由来複合名詞の叙述性再考」『言語文化研究プロジェクト 2016:自然言語への理論的アプローチ』査読なし 2017.87-96

②由本陽子　「日本語複合名詞の意味解釈メカニズム」『言語文化研究プロジェクト 2015：自然言語への理論的アプローチ』査読なし 2016.79-88.

③由本陽子　「心の中の辞書と語の文法」『學士會会報』査読なし　2016.53-57.

④由本陽子　「日本語の動詞連用形を主要部とする動名詞の複合について」『言語文化研究プロジェクト 2014：自然言語への理論的アプローチ』査読なし　2015.89-98.

⑤YUMOTO,Yoko.　“A Consideration on Type Shift of Compound Nouns in Japanese.” 『言語文化共同研究プロジェクト 2013：自然言語への理論的アプローチ』査読なし　2014. 79-88.

⑥由本陽子　「動詞複合による項の創出と主題役割の変更」『言語文化共同研究プロジェクト：2012：自然言語への理論的アプローチ』査読なし　2013. 69-78.

⑦由本陽子「「動詞＋動詞」型の複合動詞」『レキシコンフォーラム 6』査読あり 2013. 59-78.

⑧由本陽子　「語彙的複合動詞の意味解釈再考」『言語文化共同研究プロジェクト 2011：自然言語への理論的アプローチ』査読なし 2012. 89-99.

〔学会発表〕（計　4　件）

①由本陽子・伊藤たかね・杉岡洋子　「「ひとつまみ」と「ひと刷毛」：モノを測る「ひと」の機能」レキシコンフェスタ３　2015.2.1 国立国語研究所

②由本陽子　「「名詞＋動詞」型複合語の統語範疇と意味カテゴリー」日本言語学会第 147 回大会[招待]　2013.11.24.　神戸市外国語大学

③YUMOTO, Yoko.　“Motivations　and Restriction of Lexical V-V Compounding in Japanese.” Mysteries of Verb-Verb Complexes in Asian Languages.2013. 12.14. 国立国語研究所

④伊藤たかね・杉岡洋子・由本陽子　「モノ名詞に付加して動作解釈を引き出す「ひと」について」形態論レキシコンフォーラム 2013.9.7.　慶応大学日吉キャンパス

〔図書〕（計　8　件）

①由本陽子　「身体部分名詞と動詞の複合語について」『新村記念財団設立 35 周年記念論文集』臨川書店　2017. 395-312

②YUMOTO, Yoko “Chapter 9: Conversion and Deverbal Compound Nouns.” Handbook of Japanese Lexicon and Word Formation (eds. KAGEYAMA, Taro and KISHIMOTO, Hideki) Mouton De Gruyter. 2016. 311-345

③由本陽子・伊藤たかね・杉岡洋子「「ひとつまみ」と「ひと刷毛」－モノとコトを測る「ひと」の機能－」『語彙意味論の新たな可能性を探って』（由本陽子・小野尚之編 総ページ数 498）開拓社 2015.432-462.

④由本陽子　「「名詞＋動詞」複合語の統語範疇と意味カテゴリー」『日本語研究とその可能性』（益岡隆志編）開拓社 2015.80-105.

⑤由本陽子　「具体物を表す「名詞＋動詞」複合語の解釈メカニズム」『言葉のしんそう（真相・深層）』英宝社 2015.167-180.

⑥由本陽子「「名詞＋動詞」型複合語が述語名詞となる条件—生成語彙論からのアプローチ」『複雑述語研究の現在』（岸本秀樹・由本陽子編　総ページ数 437）　ひつじ書房 2014.179-203

⑦由本陽子「語彙的複合動詞の生産性と２つの動詞の意味関係」『複合動詞研究の最先端』（影山太郎編）ひつじ書房　2013. 109-140.

⑧由本陽子　「「動詞＋過ぎる」と述語名詞としての「動詞＋すぎ」」『日中理論言語学の新展開　第３巻』（影山太郎・沈力編）くろしお出版 2012. 123-143

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　0 件）

名称：

発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
由本陽子（YUMOTO Yoko）
大阪大学大学院言語文化研究科・教授
研究者番号：90183988

(2)研究分担者
(　　)

研究者番号：

(3)連携研究者
(　　)

研究者番号：

(4)研究協力者
(　　)